

演題番号：C17

重度の水晶体変位を伴う白内障手術時にカプセルテンションリング片を用いて強膜への水晶体嚢牽引縫着固定を行った犬19眼

○福本真也，長崎鉄平，伊東理実

グラン動物病院・兵庫県

1. はじめに：犬の白内障は視覚障害以外にも様々な合併症を引き起こす疾患であり、視覚回復を目的に白内障手術が実施される。そして様々な要因が術中、術後の予後に影響するが、中でもチン小帯の脆弱による水晶体変位は重要な併発症の1つである。現在、約180度以上の重度水晶体変位を併発している場合、最終的に水晶体嚢を除去することが推奨されているが前房と硝子体部との解剖学的バリアを失うことによる様々な合併症の発生が懸念される。今回、適度な大きさに切断したカプセルテンションリング(CTR)片を用いて重度に変位した水晶体嚢を強膜へ牽引縫着固定して安定化させて手術を行い、その術式と経過について検討した。

2. 材料および方法：2019年11月から2024年5月までの間に当院で約180度以上の重度水晶体変位を併発した白内障手術中にCTR片を用いて水晶体嚢を強膜へ牽引縫着固定し、術後3か月以上経過観察した症例を調査した。術式は白内障手術の基本手技である超音波水晶体乳化吸引術(PEA)を実施し、必要に応じて切断していないCTRを水晶体嚢内に移植した。次に、適度な長さに切断したCTR片1~2本を9-0ポリプロピレンを用いて水晶体嚢内から強膜に牽引縫着固定して

水晶体嚢を安定化させ、水晶体嚢内に人工レンズ(IOL)を移植した。術後は定期的に眼科検査を行って視覚、水晶体嚢の変位、合併症の有無を評価した。

3. 成績：白内障手術時に約180度以上の重度に変位した水晶体嚢をCTR片にて強膜へ牽引縫着固定手術を実施したのは19眼15頭であり。術後の経過観察期間は3か月~4年4か月であった。手術によって19眼全眼が縫着固定された水晶体嚢内にIOLが移植され、視覚回復した。経過観察期間中、19眼全眼において水晶体嚢の変位や動揺はみられなかったが、1眼が緑内障、1眼が網膜剥離にて失明した。

4. 結論：犬の重度な水晶体変位を伴う白内障手術時に、CTR片を用いて水晶体嚢を強膜へ牽引縫着して固定する方法は、小切開にて比較的簡単に水晶体嚢の変位を矯正して安定化させることができた。そして通常の水晶体変位の無い白内障手術時と同様に、水晶体嚢内にIOLの移植も可能であった。